香取遺産

Vol.59

「木造十一面観音立像」

関東最大最古の十一面観音立像

◀木造十一面観音立像（荘厳寺蔵）
香取神宮の本地仏として伝来

ＪＲ佐原駅の南西、約700ｍの高台に所在する荘厳寺には、関東最大最古といわれる十一面観音立像が安置されています。

この観音像は香取神宮の神宮寺であった金剛宝寺に伝来し、明治初年の神仏分離によって当寺に移されたものです。

十一面観音像は、頭上に10あるいは11の化仏と呼ばれる小仏像をもっています。これは十一種の威力をあらわしたもので、変化観音の中では最も古い観音です。

頭上の化仏は正面三面が慈悲相、左三面が瞋怒相、右三面が白い歯を出してほほえむ狗牙上出相、後一面が暴悪大笑相、そして頂上面は如来相をあらわすものが多くみられます。本体は二臂の像がほとんどで右手を衆生の念願をかなえる与願印に結び、左手に水瓶あるいは蓮華を持つのが普通ですが、まれに四臂の像も見られます。

この観音を祈念すれば、憂苦や病苦など一切の苦しみから免れるとされ、わが国では奈良時代以降盛んに造られるようになりました。

本像は像高３・２５ｍ。頭部・体躯をケヤキ材から彫り出した一木造。化仏、両臂、両足は別木で造られています。体部は背面より内刳りし、背板を当てています。巨像のためか、腰の両脇や両足外側に別材を補い、両肩および手も別材です。

化仏は、十面すべてを失っています。天冠台は紐状で無紋。白毫相をあらわし、鬢髪一条が耳をわたり、耳たぶは紐状で貫通。臂を曲げて左手に水瓶を持ち、右手を与願印に結んでいます。

像内および像と共に伝来した木札には、元禄13年（１７００）将軍徳川綱吉を願主として修理を施したことが記されています。

下顎の張った顔容、腹部や大腿部の張りのある肉取り、裳に明瞭にあらわれている飜波式（衣の襞の表現法）など随所に古様がうかがえます。制作時期は、9世紀末から10世紀はじめころまでさかのぼると思われます。

近くで見ると、その大きさに圧倒されます。かの奈良薬師寺の日光・月光両菩薩よりも大きな観音様です。機会があれば、ぜひご覧ください。

※昭和34年6月27日、国の重要文化財（彫刻）に指定

問い合わせ
生涯学習課　☎(50)1224